都留文科大学電子紀要の著作権について

都留文科大学電子紀要のすべては著作権法及び国際条約によって保護されています。

著作権者

- 「都留文科大学研究紀要」は都留文科大学が発行した論文集です。
- 論文の著作権は各論文の著者が保有します。
- 紀要本文に関して附属図書館は何ら著作権をもっておりません。

論文の引用について

- 論文を引用するときは、著作権法に基づく引用の目的・形式で行ってください。

著作権、その他詳細のお問いあわせは

都留文科大学附属図書館
住所：402山梨県都留市田原三丁目8番1号
電話：0554-43-4341(代)
FAX: 0554-43-9844
E-Mail: library@tsuru.ac.jp

までお願いします。

電子紀要トップへ

校訂が付された東松本『大鏡』が示す本文状況

―朱による抹消本文、朱の圏点による補入本文と筆跡から―（下）

Okagami, the Tomatsu Manuscript with Emendations (2) : A Textual Study

加藤静子 KATO Shizuko
一文字昭子 ICHIMONJI Akiko

四、東松本『大鏡』の校訂前の本文（2）

前稿に続いて、東松本『大鏡』に付された朱の校訂について、巻四～巻六の範囲の校訂箇所一覧を、次に掲げる。なお擦り消した痕跡を確認し明示した。前稿の巻一～三についても補った。見落としがないよう注意したが、限られた時間内での確認であったことを断っておきたい。

校訂箇所一覧

○東松本で朱の抹消符と圏点が付されて、訂正された箇所をすべて掲出した。行頭の上段の算用数字は根本敬三『対校大鏡』の頁数、下段は貴重籍刊行会の影印の頁数である。

○参照した本文は以下のとおりで、略号で示した。なお、書写年代の古い零本も参考のため掲げた。

陽明文庫―陽、蓬左文庫―蓬、萩野本―萩、古活字本―古、建久本―建（巻三師輔伝のみ。上段162～192頁）、池田本―池（東松

本の巻五・六のみ)、片仮名本(巻一のみで、上段の4～42頁まで)―片、近衛本―近衛、千葉本―千葉(巻二と巻四のみ)

○補入された文字が、それぞれの本にない場合、また、抹消された文字がそれぞれの本にある場合には、その旨を示した。校訂された結果と表現が同じものは何も断っていない。本文のゴシックの箇所に関わらないところの本文の違いについては省いた。漢字仮名の違いについてなど、意味のない場合は省略したが、「参考」として掲げた箇所もある。

朱の圏点により補入された文字…[文字]、

朱により抹消された文字…文字

擦り削られた痕跡に記された文字…文字 山田忠雄氏の解説にも示されてあるが、少し違いがあった。

巻四

275頁3 ひんかしさまにいるをいかなる[事]そと見れは―陽・蓬・古「事」ナシ。

276頁4 御装束たてまつりて御冠をせさせたまて

4 まくらをせさせてそのものは

5 心よからぬところそと人はうけ申さゝりしかと―萩「そ」アリ。

279頁7 おりの宣旨に[て]おはしき

283頁12 祖父殿事のほかにかなしう[し]申たまひき―萩「し」ナシ、古「かなしう申させ給き」。

284頁13 式部かの[りたる]かたをはおろして―陽・蓬・古「式部のかたをは」、萩「式部かかたをは」。

285頁14 かゝやくとこそ[は]見えさせ給しか―蓬「は」ナク、「見えさせ給しに」と続く。

286頁15 春宮にたゝせたまひ七にて位につかせたまひ[に]しかは―近衛「…つかせ給ひしかは」。萩「に」ナク、「位につき給しかは」と続く。

287頁16 陸奥守倫寧のぬしの女[の]はらにおはせしきみ也

16 道綱なときこえし

16 [この]母君きはめたる和哥の上手にておはしけれは―陽「このきみはきはめたる…」、蓬「此君はきはめたる…」、萩「この女君きはめたる…」／萩「て」アリ。

288頁17 かよはせたまひへりけるほとの―(東松本では「たまひ」の「ひ」を小さく書き入れる)。千葉「かよはせたまけるほとの」トアル。

そのはらのきみそかし[この]みちつなの卿の後には―陽「そのはらのきみそ道綱卿のちに」、蓬「その腹の君そ道綱卿のちに」萩「そのはらのきみそその道綱卿のちに」、古「その御はらの君そこの道綱卿後には」。

289頁18 このおとゝは[これ]東三條のおとゝの―陽・蓬・古「は」ナシ。／萩「はこれ」ナシ。

290頁19 をのこは[上戸ひとつの興のこと]にすれと(紙の継ぎ目の先頭)

19 もてはやさせたまふほとにあまりやう〳〵すきさせたまてのちは―陽・萩・古「あまり」アリ。蓬「もてはやさせ給にあまり…」。

291頁20 この殿[御酔]のほとよりは―古「殿御」ナシ、陽・蓬

「この殿の御ゑひの…」。

21 御前の松のひかりにとをりて御らみゆるに—萩・古「御らんするに」、陽「こらんするに」、蓬「御覧するに」。

292頁21 入道殿おりさせたまへるにさてもあるへき事ならねは—千葉「さても」。

293頁22 きよらかにて【そ】おはしましゝ—「そ」ナク、陽・蓬「きよらにておはしましゝ」、萩「きよけにておはしましゝ」、古は「きよけにおはしましゝ」。

23 御心におほしならひたることなれは【にや】あの地獄の—陽・蓬・古「にや」ナク、陽・蓬「御心におほしめしならひたることなれは」トアル。萩、この部分「つねに…にや」まで欠く

23 御かたちそいときよらにおはしましゝはや—陽・蓬「はや」アリ、「…いとけうらにおはしましゝはや」トアル。古「はや」デハナク「そ」トアル。

296頁25 御とし廿九にてあさましうてやませ給にしかは—陽・古・萩「九」アリ。蓬コノ部分ナシ。

26 このみやの御母后の御さしつきの中の【君】は—陽「…御はゝきさきのおとゝなかの御かたは」、蓬「御母后のおとゝなかの御かたは」、古「御母后の弟中の御方は」、萩「御母后の御さしつきの中の御かたは」

298頁27 作文しあ【そ】はせたまけるに—参考、陽・蓬・萩「作文し」のところ、「ふみつくり」トアル。

28 その座にて【は】饗応し申てとりあらそひけり—陽・蓬・萩・古「は」ナシ。

300頁29 その宮の上の【御】さしつきの…四の君は方には御匣殿と申し—古「御」ナシ。千葉「御」ナシ。／「四の君は」ノトコロ、陽・蓬・萩・古「四の御方は」トアル。

29 式部卿のみやの【御】はゝしろにておはしましゝも—陽・蓬・萩・古「御」ナシ。陽「式部卿の宮はゝしろにて…」の表記。

30 いまの皇【大】后宮にこそはさふらひたまふなれ—陽・蓬・萩・古「大」ナシ。

304頁34 ありき給し【御】ありさまもいとおちゐてもおほえ—陽・蓬・萩・古「御」ナシ。

34 梅壺のひんかしの屏【のと】のはさまに—陽・蓬・萩・古「のと」ナシ。

305頁35 せはきところにて雑人はいとおほくはらはれ—陽・蓬・萩・古「て」アリ。

35 とみに【え】のかていとこそ—古「え」ナク、「とみのにて」トアル。

306頁36 たひらかにかへらせ給【へる】にかの殿も—古「へる」ナシ。

309頁40 いかやうなる御心地そといとたい〳〵しき—萩「御心にて」。

310頁41 さま〳〵おほしゝき事ともたかひて

312頁43 おほしかけぬ御ありさまなめれあはれなめりかし—陽・蓬「あはれなめりかし」、古「あはれなめるかし」、萩「あはれなめれかし」。

313頁43 人にいひのた【て】せさすな

43 よのなかにありわひなんときは出家すはかり【なり】となく〳〵いひおかせたまけるに—陽・蓬・萩・古「なり」ナシ。（陽「ありわひん」トアル。）

44 中将をたにえかけたまはすなりにしはそいとかなしかりしことそかし—陽・蓬・萩・古「はそ」ノトコロ「こそ」で、結びが、萩ノミ「いとかなしかりしか」トアル。

44 故帥中納言惟仲の女にそすみ給て—陽・蓬・萩「そ」アリ。古「女とそ」トアル。

314頁45 みそかにゝけていまの皇【大】后宮にこそまいりて—陽・蓬・萩・古「大」ナシ

45 かのきみ【さやうに】しれ給へる人かは—陽・蓬・古「さやうに」ナシ。

316頁47 （御賀茂詣でに「御」は朱の見セケチに見えるが、朱ではない）

317頁47 権中納言のなきこそなをなをさう〳〵しけれ（「なを」で改行）

319頁51 とのもいみしう【そ】もてはやしきこえさせたまふける—陽・蓬・萩・古「そ」ナシ。結びは、陽「きこえさせ給ける」、蓬・萩「聞こえさせ給ける」、古「きこえさせ給ひけり」トアル。

51 おほせられけるに【あはれの】人非人やとこそまうさまほしくこそ

320頁52 節会行幸には…たてまつらぬことなるを単衣【を】あをくてつけさせたまへれは—陽・蓬・萩・古「を」ナシ。

53 もみちかさねにて【そみえける】—陽・蓬・古「そみえける」ナシ。萩「みえける」ナク、「もみちかさねそ。」

322頁54 傅殿の御子に小宰相の中将兼経の君このふたところの—陽・蓬「傅殿の御子のにこさい相とそきこゆめるふたところの」。萩「傅とのゝ御子の宰相の中将兼経君よの人にこさいしやうとのとそ聞ゆめるふたところの」。古「帥殿の御子の今宰相とそきこゆる二所の」。

326頁58 この【殿の】御子のおとこきみたゝいまの蔵人の少将良頼のきみ—陽・蓬・古「殿の」ナシ。陽「この御子おとこきみ」トアル。

327頁59 雑色五六十【人】はかりこゑのあるかきり—陽・蓬「十」ナシ。千葉「十」ナシ。／陽「こゑをあるかきり」トアル。

60 五六尺はかりなる杖とももたせ【させ】たまひて—陽・蓬・萩「させ」ナシ。古「させたまひ」ナシ。参考、近衛「…杖ともゝたもせさせ給ひて」。

60 洞院のうらうへにひまなくたてたてなめてみかとのうちにも—「てなめて」で改行。陽・蓬「たちなみて」、古「うらうへに…たてたてなめて」ナシ。

329頁62 頼親の内蔵人頭周頼の木工頭なといひし人

62 【小】一条院の御みやたちの御めのとのおとこにて

331頁64 二條にかへりたまふ御ともの人はよきもあしきも—蓬・萩「の」アリ。参考、近衛「御ともの人は」と表記。

332頁66 小野宮右大臣殿の御よろこひにまいりたまへりけるおり母屋の—陽・萩「おり」、蓬「折」、古「をり」。

66 いとあやしう侍りてとには【え】まかりいてねは—陽・蓬・古「え」ナク、陽・蓬「いとあやしくはへりてとみに

はまかりいて（蓬「出」トアル）ねは」トアル。
333頁67 おもきやまひをうけとりたまひてけれはいかてかは御色もたかひて—陽・蓬・古「いかてかは」アリ。萩「いかてか」トアル。
334頁68 のほりたまひてものゝ［ね］調子ふきいつるほとに—陽・蓬・萩・古「ね」ナシ。
338頁73 御かほ［を］たにえ見たてまつり—古「を」ナシ。陽「を」は補入。
340頁75 よからぬ御事［とも］［こそ］きこえし［か］—陽・蓬・古「こそ」ナク、陽「御こともきこえしを」、蓬「御ことも聞えしを」、古「御事ともきこえしを」トアル。萩「とも こそ」ナク、「きこえしを」トアル。

巻五

342頁2 これはよのえにはおはしま［さ］す
2 あかりてのよに［も］かく大臣公卿
343頁3 それ［に］またおとゝうせ給にしかは—萩・古・池「に」ナシ。
3 粟田殿にわたりにし［そかし］—池「そかし」ナシ。
4 ゆくすゑまちつけさせ給へき御よ［はほ］ひのほとにて—池・萩「御よそほひの」
346頁7 寛仁二年…御元服せさせたま［ふて］その二月に—古・池「て」アリ、池「…せさせ給て」トアル。萩「…せさせ給し」トアル。
347頁7 十月十六日にきさきにゐさせたま［ふて］—池・萩「て」アリ、池「后にゐさせ給て」、萩「后にたゝせ給て」トアル。古「…后にたて〳〵まつるへき宣旨…」と続く。
350頁10 入道殿と申［もさら］［なり］おほかた［この］ふたところなからさるへき—池・萩「もさら」「この」ナク、池「入道殿と申は又おほかたふたところなから」トアリ、萩「入道殿と申せはおほかた二所なから」トアル。古「この」ナシ。
351頁11 こゝろうかりし［事そかしその］御女におはします—池・萩・古「事そかしその」ナシ。
354頁13 入道殿おもひをきてさせ給やうあ［りけむ］そかしな—池「あらむとそかしな」、萩・古「あらんとそかしな」。
356頁16 人〃のいひけれは［われは］佛にならせ給はんもうれしからす—古「われは」ナシ。
357頁16 殿のうへも［おほんことも］あまたおはしませはいとよし—萩・古・池「おほんことも」ナシ。池「とのもうへも」トアル。
17 かくてのちに［こそ］これかみえけるなりけりと—萩・池「こそ」ナシ、古「こそ」ノトコロ「そ」。「こそ」の結びは、東松・萩・池「おほせられける」、古「おほせられけれ」トアル。
360頁20 なとの大納言にならせ給しおり［はさり］と［も］御みゝとゝまりて—萩・古・池「は」ナシ。古・池「も」ナク「されと」トアル。
20 十二人かすのまゝに［て］おはします—萩・古・池「て」ナシ。
20 おとこも女も御つかさくらゐこそこゝろにまかせ給［へ］

367頁24 らめ—蓬「へ」ナシ、萩・古「給つらめ」。
ゐなか世界の民百姓これこそ［は］たしかにみたてまつりけめ—古「は」ナシ。
371頁28 内大臣殿［を］たにちかくて［え］みたてまつりたまはぬよ—池「内大殿をたに」、古「内大臣をたに」トアル。／萩・古・池「え」ナク、萩「ちかくみたて…」トアル。
372頁30 いとけうあることなり［さらは］いけ道隆は—池「さらは」ナシ。
373頁30 やくなしとおほしたるに［入道殿は］つゆさる御けしきもなくて—萩・古・池「入道殿は」ナシ。
30 御てはこにをかせたまへる［小］刀まして—萩・古・池「小」ナシ。萩・古「かたな申て」と表記。
375頁32 この殿のかく［て］まいりたまへるを
376頁33 ついてに内大臣殿はいかゝおはすなと［とふに］—萩・古・池「おはするとゝふに」トアル。
378頁35 三条院の御時の賀茂行幸の日ゆきことのほかに—古・池「の」アリ。
36 御ひとへきぬのそてをひきいてゝ
381頁38 おなしものを中心にはあたるものかはつきにそ帥殿いたまふに—池「そ」アリ。
382頁40 帥殿の御うなしのもとにいとちかう［うち］［よせさ］せ給てとくつかうまつれ—古「うちよらせ給て」、池「…ちかうけちよせさせ給て」トアル。
384頁42 皇后宮をねんころにときめか［さ］せたまふゆかりに—萩・池「さ」ナシ。参考、近衛「ときめき」の「き」を見セケチにし、「かさ」と傍書。
386頁44 御むねつふれさせ給けるほとに［とはかりありて］とを
387頁45 この入道［殿］もいかゝとおもひ申侍しに
389頁47 このおとゝはもとより男一人女一人［をそ］もちたてまつり—萩「をそ」ナシ。古・池「そ」ナシ。
390頁48 みな宰相はかりまて［そ］なりたまへる—蓬・萩「そ」ナシ。
392頁50 まことに申へきかた［な］くこそ—（萩・池本、この前後、東松本の十一行分ほどを欠く。）
393頁51 女御の子を聖武天皇の女帝にするゐたてまつりたまひてけり—池「女御の子を」、萩「女御の御こを」と、「の」アリ。
396頁54 房前の［大臣］四男真楯の大納言—池・萩「房前大臣の…」トアリ、古「房前おとゝ宰相」トアル。
400頁58 鹿嶋といふ所に氏の御神をすましめたてまつり給てその［御］よゝり—「その［御］よゝり」ノトコロ、蓬「其時より」トアル。
402頁60 大原野吉田に例にたかひあ［や］しき事いてきぬれは
404頁61 かの［御］寺いかめしうやんことなき所なり
62 山しな道理とつけてをきつまつかゝれは藤氏の［御］ありさま—池「まつ」アリ「まつかれは」トアリ、「御」ナシ。
408頁66 萩「まつされは」トアル。
416頁74 后三人ならへすへてみたてまつらせ給ことは入道殿［下］よりほかに—萩・古・池「下」ナシ。
人はたへかたけに申めれとそれはさはきゝ給はぬか—古・池「と」アリ。

417頁75 又飯酒にともしき目見侍らず—萩・古・池「に」アリ。
418頁77 三日かねてせしめたまひしになんまいり【て】侍しと—池「て」ナシ。
422頁80 御堂〃〃あけつゝ【まち】申させ給—（池本文を欠く）
423頁82 なけしのおりのほ【ら】【せ給】御手【を】とらへつゝ—蓬・萩・古「の」アリ／萩・古「せ給」ナク、萩「おりのほり」、古「おりのほる」トアル。／萩「を」ナシ。（池本文を欠く）
424頁83 くさのはのいろのやうにて又あかくなりなとさま〳〵のやうにあせみつになりて—萩・古「のやう」アリ。（池本文を欠く）
429頁88 五月廿四日こそは冷泉院【は】誕生せしめたまへりしか—萩・池「は」ナシ。
430頁89 いとかしこき夢想みたまへりし也【さ】覚侍しことは—萩「…夢のさう見侍し也」トアル。

巻六

433頁2 その日のうちにけかう【つかま】つらさりしかはちゝ【か】やかてその御社の—萩「か」ナク、「母やかて」トアル。池「ははかやかて」、古「母かやかて」トアル。参考、近衛「けかうつかまつらさりしかは」とあるが、「つか」を補入。
3 焼亡かとおもひてかみを【見】あくれはけふりもたゝす
3 こゝろもなきまてまとひ【まかり】しかはおのゝみやのほとにて
434頁4 賀茂【の】堤のそこ〳〵なる所に侍従殿鷹つかはせ給て
436頁5 霜月のはての酉日にて【は】侍るそはしめたるあつまあそひの—池「は」ナシ。
441頁10 行幸につかうまつり給へる人〃【みさ】なから興し
443頁12 やむことなきものにおほしめした【り】し中にも—萩「おほしたりし」トアル。
12 ことはつるまゝに【こそ】中山へはいませしか—池「こそ」ナク、結びは「中山にはいませしか」トアル。
448頁17 位にかへりつかせ給【へき】御いのりなとなさせ給けり【と】あるは—古・池「へき」ナシ。萩「つかせ給はんの」トアル。
451頁21 ある人城外やしたまへり【し】といへは—古「…城外やし給へるといへは」、池「…城外し給へるといへは」、萩「…城外やし給なといへは」。
452頁22 我は京【人】にも侍らす—池「人」ナシ。
452頁22 みちのくにあさかのぬまにそ侍りし【といへは】いかてか京にはこし【そとゝへは】その人とは—古「侍しといふ」。／萩・古・池「とゝへは」ナシ。
453頁23 たと〳〵しけにかたるさま【ま】ことにをとこにたとしへなし—池「ま」ナシ。
23 いてこのおきなのをんなの人こそ
456頁26 いかてかさる有識をはものけなき—萩「か」アリ。
26 おきなをまたひとによもほかめせさせ侍らぬをやと（黒の抹消符の上を朱がなぞる）—蓬「…人よもほかめ…」
457頁27 いかてこの高名の琵琶【ひ】き—参考、池「いかて」ナシ。

459頁29 いへは侍【も】あまえたりき—萩・池「も」ナシ。
461頁31 世の案内もしらすたつき【なかりしかはさるへき】公事の
をりは
462頁32 ひきいつるおりにとひたちけれはかひありとよろこひ
（墨の抹消符の上を朱がなぞる）
32 東三条殿の御賀茂まうてせさせ給しには【この一条殿もま
いらせ給き大臣にならせ給ぬれは】さる例なけれとも—池
「この一条殿もまいらせ給き大臣にならせ給ぬれは」ナシ。
466頁36 にはかに【は】いかゝあるへからんとおほせられけるを—
池「は」ナシ。
467頁37 頭中将下襲のしりはさみて移を【き】たる馬にのりて
院のをはしますなり【けり】と見て
37 御堂の北の庇にこそ【は題名僧の座は】せられたりしか
471頁41 湯漬はか【り】給ふ行事二人に—参考、萩「ゆつけはかり
41 をたふ行事二人は、古「ゆつけ斗たふ行事…」。
475頁45 公忠【か】すこしひかへつゝ所をき申しゝを
477頁47 いかなれはかくてはおはしますそ【とをもひて】とはかり
御前に—萩・池・古「をもひて」ナシ。
478頁48 かすかにまいらせたまひつりけるにおまへのものともの—
萩「春日にまいらせ給へりけるに」、古「春日にまいらせ
奉りけるに」、池「かすかにたてまつり給へりけるに」。
49 ふきまつひて東【大】寺の
479頁49 御簾すたれの内はか【り】やおほつかなさ
482頁53 けふこの御寺のむねとそれをはさつけ給講の庭にしも
53 百歳になる時ほとけはいて【お】はしますなりされと

483頁53 不定なりとみせさせ給はさるへけれはにやこのころも—
古・池「はさるへけれは」アリ、萩「へるさるへけれは」
トアル。
484頁55 十はか【り】にて陽成院のをりさせたまふとしは—萩「十
はかりにて」ナシ。
485頁55 こと事【と】はんと思給へしほとに
487頁58 又鳥飼院におはしましたる【に】れいの遊女とも—古・
萩・池「に」ナシ。
491頁62 哥よみなれとからうおとりにしことそかしと【いふ】侍—
参考、池本文を欠く。
494頁65 いつれともなく【見】まきらはしてし—参考、池本文を欠
く。
66 ふかくさの御時よりありけることゝこそゝれ【か】さきは
をりて—参考、池本文を欠く。

ところで、巻一～三までの校訂箇所一覧には、校訂箇所の削り改めた文字が掲げていない。再度調査させていただいて確認した箇所、及び前稿の訂正部を次に掲げたい。ただし、異同は再掲していない。

巻一

19頁20 いとかたしけなき事なれと【是は】みな人の
32頁29 前坊をうみ【たて】まつらせたまふ
39頁36 月のかほにむら雲の【かゝりて】すこし
46頁44 もうさせたまひてけり【され】は代々のわたり物にて
52頁50 枝もしけりてこのみをむすへやしかれは—コノ部分一覧か

ら削除スル。
61頁61 それはあまりあかりてこのきかせたまふ【は】ん人

巻二

80頁19 おほしめしいて、令作給ける
去年今夜侍清涼秋思詩【篇獨断】腸
104頁48 物とひ給へば神の【御】【たゝり】とのみいふに
112頁57 しるしはおはすると【ひと】也
143頁88 きこえさせたま【ふ】へ【か】なるなと
151頁98 母【宮】たにもえしらせ給はさりけり
155頁104 よかへきやうにをしへ【なと】をこれこそは御本意よと
158頁106 父大將のとらせ【給】へりける處分の

巻三

163頁2 みかとをもつ【ね】にはふすへまうさせ給て
165頁5 女房はせしとて伊尹兼通兼家なとか
169頁10 おはしましきみかと春・宮と申たゝ【代々】の關白攝政とまうすも
173頁14 中將の申給てかし。（朱の挿入符アリ）
176頁18 佛法をさへあかめ給てあし【さ】ことの御念誦
199頁48 阿闍梨君そこは【なと】心地よけにては
208頁58 おもひかけ【ぬ】【事なれは】道理なりや
209頁59 この【たひ】【申させ給はて侍】なんやと申
217頁70 そのころのいひことに【こそし侍】【しか】
233頁87 一條殿のおなしきにや。このとのゝ御著袴に（補入ヲ示ス圏点ノミアリ）—近衛本・御所本二本文アリ。
238頁89 やをらとりい【たし】【て】ふところに
242頁94 大將朝光と【そ】申し［このかみの大臣宰相にておはしけるほとはこの殿は中納言にておはしけるひきこされ給けるそめてたくそのころなと］おり
260頁98 女君五人おはしき【をんな】二【所は】
265頁104 御おほちの太政大臣【殿】我子にしたてまつりたまて
269頁 らうたきものにせたま【ひて】つねには
272頁112 右衛門督たちゐなけくさ【め】にきこえ給けれは

五　東松本『大鏡』朱の圏点による補入文字について（2）

先に巻一・二・三に共通して見られた「と」（字母「止」）・「の」（字母「乃」）・「へ」（字母「β」）・「御」・「給」について、引き続き、巻四・五・六での状況を考察し、最後に全体の結論を述べることとする。

前回考察したものと今回のものを表Ⅰとして整理した。なお、画像資料番号は混乱をさけるために前回からの通しとしたので、「と」は　から、「の」は　から、「へ」は　から、「御」は　から、「給」は　からそれぞれ始まっている。

巻四の裏書は漢字のみなので、「と」「の」「へ」のサンプルは巻五と六からのものである。また、「給」も巻四の裏書にはなかったため、巻五と六からとっている。

「と」の比較（資料1補・資料1裏）

補入文字「と」はおおよそ、四種類の特徴で分類できる。巻三⑤にみられた、第一画が折れ曲がり、第二画の起筆が丸まって下に下がる傾向を持つ「と」が巻五⑮にもある。第一画がほぼ、直線で、第二画が一画目の終筆を受けてくの字に入る、裏書の「と」と同じ特徴を持つものとして、⑭⑱⑳があげられる。目立って異質な字が⑮であり、これと同類の字が巻三⑤に見られるということは、補入文字が複数の手によって入れられたと仮定したとき、巻毎に分担して入れられたのではなく、それぞれが一通り目を通して入れたと考えられるのではないだろうか。

「の」の比較（資料2補・資料2裏）

補入文字「の」は字母「乃」の形を残したものと、完全に平仮名化した「の」があるので、まず「の」から見ると、終筆の部分で、角度をつけて、左へ抜ける「の」として、⑯⑰がある。裏書きのなかにもこの特徴をを持つ「の」（qst）がある。補入文字ではその他に全体的に滑らかに書かれている⑱、終筆に勢いがあり、やや上向きになっている　、補入文字全体が他と比べて筆勢が弱いがある。

字母の形を残した「乃」については　すべてが、第一画目を押さえてから入っており、これは裏書の「乃」と同じ特徴である。なお、前稿にも述べたが、裏書の「乃」は例外なく、第一画目を押さえて入る。この特徴は巻二の③のように自然に入るものとは明らかに違う特徴なので、異筆と考える方が自然である。巻一・二・三の考察ではこの第一画目を押さえて入るのは、巻三⑥⑦の二つで、他の①③④は自然に入っており②⑤は不明である。自然に入るものの方がやや多いが後半の巻四・六は三例すべてが押さえて入っている。

「へ」の比較（資料3補・資料3裏）

補入文字「へ」は右側に三種類の特徴が見られる。右側に張りがあり、滑らかなもの（⑧）と、右側にへこみのあるもの（⑨⑩⑬）と、右側はほぼ直線で終筆を押さえているもの（⑪⑫）である。裏書の「へ」は連綿の中で形が変形しているものも多いが、右側はすべて張りがあって滑らかである。「へ」のへこみも多分に作為的なもので異筆と考えてよいと思われる。

⑧が偶然にも巻二の②③と同様、「へる」という綴りで、「る」に関しても、格好の比較材料となるが、興味深いことに「へ」の右側に注目すると、②と⑧が近似しており、「る」をみると③と⑧が近い。「へ」のへこみも、「る」の形もそれぞれに非常に特徴的なものである。特に「る」の形は人によって変わりやすいものであるので、この三様の出現の仕方は少なくとも三人以上の手になる可能性が推定される。なお、裏書に見られる「る」はkに出ているように、上部の省略が著しく、⑧の「る」と同類のものである。

「御」の比較（資料4補・資料4裏）

補入文字「御」は巻一・二・三では明確に四種類の文字が確認される。巻四・五（六にはない）では表Ⅰの分類番号でいうと19，20，21の三種類の特徴を持つ文字が確認される。特に巻五の⑯⑰は中二行を隔てるだけで、二種類の違う文字が書かれている。どちらも単

独で書かれているので、異筆とみるのが自然であろう。

裏書は巻四・五・六にみられるすべての「御」が偏が右下かほぼ真下で止まり、おおざとの終筆が跳ねるかもしくは跳ねる直前でとどまる形で終っており、例外がない。なお、仮名文の部分に「御」はないので、ここでは補入文字⑫⑯が裏書と同じ特徴を備えた文字であるということができる。

「給」の比較（資料5補・資料5裏）

「給」は巻五に一文字、六には同一箇所に二文字見られ、すべて行書で書かれている。三カ所とも起筆は上から自然に入り、終筆は一度左へ押されている。⑦⑧とでは書き方が異なるが、⑦と⑧の最初の「給」はどちらも偏から旁へむかう線が強く、共通する癖をもっているといえる。

裏書の「給」は漢字の部分に現れるのでほぼ楷書である。したがって直接の比較はできない。そこで巻一・二・三にみられた裏書の行書のものと比較すると、裏書の字は、起筆は滑らかで自然であるが、jでは偏から旁へ向かう線は偏の線と比べ弱く、hとiはほぼ同じであるので、どちらかというと巻五・六の補入文字⑦⑧とは逆である。巻一・二・三では、補入文字には起筆を押さえるもの③④⑥と滑らかに入る⑤の二種類がみられたので、巻五・六では⑤と同じ特徴を備えているといえる。

つまり、「給」に関しても、補入文字にはやはりいくつかの異なる文字が巻を越えて入り混じっていることになる。

以上、後半部分について、個々の文字レベルでの比較を述べてきたが、その結果は前半の巻一・二・三と同様に補入文字には数種類の異なる特徴を持つ文字が見られるという結論となった。裏書との関連に関していえば、個別の文字レベルでみる限り、全く同じと断定はできないが、共通する特徴を持つ文字が見られる。

数種類の文字が同じ補入部分にあって、しかも文字レベルの考察では相反する結果が出ている場合は、どの特徴がより優位であるかを考えなければならない。考察の対象となったそのような箇所は、全巻を通して八カ所ある。そのうち、まず注目しなければならないのは、巻二の八頁にある「このとのゝ御母」（表Ⅰ・2008）の部分である。「この」の「の」は字母の形を残した「乃」であるが、第一画目が自然に、滑らかに入り、裏書でみられるような打ち込みがない。この違いは最初のものが無意識に始まるのに対し、打ち込みは意識的で人工的なものである。しかも、裏書の「乃」にはみな、打ち込みが確認できることから、この部分は裏書とは異筆であると思われる。そうすると、「と」および、「御」はどちらも裏書と共通する特徴を持つが、異なる人物の手になると考えなければならない。つまり、一見、裏書筆者と非常によく似た文字を書く、違う人物が本文に文字を補入したという結論になる。

さて、そうなると、巻一の二十九頁にある「四月廿二日春宮にたゝせ給御とし十九同九年丙午」（表Ⅰ・1029-1）は「御とし」の「御」も「と」も裏書と共通する特徴を持っているが、それが直ちに裏書と同筆であるということにはならない。巻三・一〇二頁にある「三の御かた」（表Ⅰ・3102）も同様である。

確かに筆跡の趣が少し異なるからといって別人の手になると考えることは危険ではあるが、文字の補入のような作業の場合、意識的

	該当個所（巻四・五・六）				裏書との関係
その他の箇所	4019	6022	6032	その他の箇所	
⑤3006				⑮5044	
		⑰6022-2		⑯6017-2⑲6047	
⑥3013					
③2034④2099⑦3051 ⑧3077⑪3101				⑭5033⑱6022-3 ⑳6055-2	裏書と共通する特徴。
⑨3094-1⑩3094-2	⑫4019			⑬5016-2	
⑧1016				6041-1	
⑨2010⑩2069⑪3072 ⑫3084				⑯4016-1⑰4017	裏書と共通する特徴。
	⑱4019				裏書と共通する特徴。
			⑳6032	⑲4058	
①1017					
④2050					裏書と異なる特徴。
⑤2059					
⑥2100				4016-2　4051-2 6004	裏書と共通する特徴。
①1057③2058				⑨5020-3⑩6017-1 ⑬6031	
②2014④2084⑤2096 ⑥3054⑦3058				⑧4036	裏書と共通する特徴。
		⑪6022-2		⑫6022-3	
⑤2024				⑫4020⑯5061	裏書（漢文部分）と共通する特徴。
⑦3011⑧3039⑨3044				⑬4029-1⑭4029-2 ⑮5058	裏書（仮名文部分）と共通する特徴。
⑩3091				⑰5062	裏書と異なる特徴。
⑥2042					
					裏書と共通する特徴。
②2010					
③2087④2106⑥3097					裏書と異なる特徴。
⑤3059			⑧6032-1,2	⑦5082-1	裏書と共通する特徴。

表 Ⅰ

文字	分類番号	特　　徴	該当個所(巻一・二・三)				
			1029－1	1029－2	2008	3094	3102
と（止）	1	第一画が折れ曲がる。第二画の起筆が丸まって下に下がる。					
	2	第一画が折れ曲がる傾向が見られる。					
	3	全体の姿勢は⑤に近く、筆勢は滑らか。					
	4	裏書の「と」に近い。第二画目の起筆が一画目を明確に受けた跡が見られる。	①1029		②2008		
	5	連綿の中にあり変化している。					
の（の）	6	終筆が一度折れて、左へ抜ける。筆勢が極端に弱い。					
	7	終筆が一度折れて、左へ抜ける。筆勢が滑らか。				⑭3094-3⑮3094-4	
	8	筆勢が全体的に滑らかなもの。				⑬3094-1,2	
	9	終筆がやや、上向きで筆勢が滑らか。					
の（乃）	10	第一画目が自然に入る。墨が薄い。					
	12	第一画目が自然に入る。			③2008		
	13	第一画目の入り方は不明。墨が薄いか。		②1029			
	14	第一画目の入り方は不明。					
	15	第一画目は打ち込んで入る。					⑦3102
へ	16	右側の線にへこみがある。					
	17	へこみナシ。					
	18	へこみナシ。終筆をはっきりと押さえているもの。					
御	19	おおざとの終筆が跳ねて終わる。	①1029-1	②1029-2 ③1029-3	④2008		⑪3102
	20	偏が右下を向き、おおざとが左に抜ける。					
	21	偏が右下を向き、おおざとが右向きに止まる。					
	22	一本調子で筆勢が弱い。					
給	23	楷書の形を残しているもの。旁の屋根が右上がり。		①1029			
	24	楷書の形を残しているもの。旁の屋根が右下に払ってある。					
	25	行書にちかいもの。第一画が押さえてから入る。					
	26	行書にちかいもの。第一画は自然に入る。					

※「の（の）」⑨2010と「給」②2010は同じ頁の別の箇所

に文字の形にこだわるとは考えられない。したがって、先の「乃」の第一画のように、まず同一人物の中で無意識に変化するとは考えがたい特徴の違いに注目すれば、「御」のおおざとが左にぬけるもの（表Ⅰ・分類番号20）と右向きに止まる（表Ⅰ・21）、「給」の行書で第一画面が自然に入るものと打ち込んでいるものはそれぞれ裏書とは別筆であるといってよいのではないだろうか。

それとともに、前稿でも述べたが、補入文字には大きさの異なるものが見られ、仮に、「と」の例でみると、「と」⑭を標準の大きさとすれば、⑬や⑲は大きく、⑫は字が小さい。それらの大きさの異なる文字が不規則に見られる事と合わせて考えると、補入文字は複数の人物がそれぞれに一通り、目を通して入れたと考えるのが自然であると思われる。最初に東松本を一瞥したとき、裏書と同じ手ではないかという印象を受けた原因は、少なからず裏書の文字と共通の特徴を備えた文字があった為と考えられる。

細かに見れば、裏書の文字の筆者とは断定しかねるが、このように同じ特徴をもつということは、裏書と補入文字の筆者たちが近い関係にあったからではないかと思われる。同一圏内にいる人々であれば、師弟（あるいは上下）関係によって筆跡が似てくることは十分に考えられることである。また、補入の圏点の入れ方に統一性が感じられることは、一つの方針のもとで写本に手を加えていくという行為が進行した可能性を示唆している。

このように圏点による補入文字を全巻通して考察すると、

1、筆跡に数種の特徴を持つ文字がある。
2、大きさの異なる文字が入り混じっている
3、裏書きと似た文字も見られる。
4、圏点自体の入れ方には統一性がある。

以上の四点にまとめられる。このことから一つの方針のもとに数人の手によって校訂作業が進められたのではないかとの推定が導き出される。

以上が、補入文字の特徴から考察した結論である。

六　東松本の校訂前の本文系統

校訂一覧で一つ一つ具体的に検討したように、東松本には、誤写を訂正した他に、他本により「校訂」した痕跡があることが、はっきりして来たと思われる。同じ系統に属する近衛本・千葉本と校訂後の本文と不一致なものはすべて挙げたが、校訂前と一致するものは、近衛本全巻中、わずかに巻一と巻四にそれぞれ一箇所、計二箇所のみであり、巻二と巻四が残る千葉本とでは、巻二に一箇所、巻四に三箇所に過ぎない。それに対して、別系統の裏書分註本や異本・流布本系統については、かなりの数にのぼった。

ところで、一文字昭子が文字の筆跡から考察したように、東松本はもとの本文に、数人の手によって―だから何回かにわたって―、それも六巻を通して、「校訂」作業がなされたらしいという。確かに、東松本は他本に比して読めない箇所がほとんどないと言ってよいほど、優れた本文になっている。一つに、校訂作業が丁寧になされた結果と見てよいであろう。

それでは、校訂前の本文とは、どのような性格の本文であったのか。それを見るために、校訂箇所一覧としての結果を数量化して、表Ⅱに掲げた。表について整理しようとすると、抹消と補入には、

単なる書写の際の誤りを訂正したと思われるものもあり、また、他本による校訂であっても、校訂以前の文字は擦り消された箇所もあり、それらをどのように解釈するかが難しい。しかし、一応、校訂前の東松本本文と一致する数を、各写本ごとに数えてみた。

［表Ⅱ］朱による校訂前の本文と一致もしくは類似する箇所の総数

朱	巻一（32箇所）	巻二（70箇所）	巻三（82箇所）	巻四（67箇所）	巻五（54箇所）	巻六（44箇所）	
一致数	15	27	59	49	39	18	207 323
陽明文庫本	9	20	45	37	0	0	111
蓬左文庫本	10	20	45	37	4	0	112
萩野本	8	18	48	35	25	10	144
古活字体	8	12	35	39	22	8	124
建久本			18				
池田本					29	14	

巻ごとに、朱の施された箇所の数値と、校訂されたとおぼしい総数（「一致数」とした）を右欄に掲げた。東松本のもとの本文と各写本間で、ほぼ一致した表現の数をそれぞれあげたが、正確に数えることは、削られた文字を再現することができないので、不可能に近い。あくまでもおおよそ一致していると思われる数として了解されたい。さらにまた、東松本には、朱が入った箇所以外にも、削って文字を改めた箇所がある。ただの一カ所の墨の見セケチもないところから、もとの本の書写の際になされたものもあろう。が、校訂の段階で、文字が収まる空間であるならば、その際に校訂されたかもしれず、より正確を期するには、そちらも検討する必要があるのだが、擦り消されたもとの文字が、その字とわかるのはわずか数箇所だけで、他はきれいに消されてある。ゆえに、参考までに、本文のある行に擦り消された痕跡についてその数のみをあげておく。

巻一59　巻二48　巻三45　巻四72　巻五57　巻六58

誤写を訂正しただけでなく、帝紀や列伝に立てられた人物のかなり長い双行注らしい跡や、表Ⅱ同様他の写本とぴったり一致する箇所もかなりの数があった。このため、さらに表Ⅱはあくまでも参考としての数値という限定がつく。

表の横軸の諸本名について再度言及すると、陽明文庫本と蓬左文庫本が、いわゆる裏書分註本であり、前稿で説明したように、平田氏の整理ではA系列、秋葉氏の［一］の第二種本である。

零本であるが、一つの物指として作用させるために、書写の古い建久本と池田本の数もあげておいた。ともに異本系統の本文である。

数値を見ると、萩野本が最も数が多くなる。萩野本は、前稿で紹介したように、平田俊春氏の系統図では異本系統に置いている。増補された本文であるために、その本文のみでは同じ系統の建久本や池田本などの古い書写になる本文系統とは、とても同じ趣があるとは思えず、秋葉氏は別系統という考えにたった。けれども東松本の朱が加えられた箇所で、萩野本が建久本とほとんど一致し、池田本とも一致する数が多いのは、萩野本が内部に増補以前の古い異本系統の性格を持っているからと思われる。ゆえに、秋葉氏説ではなく、平田氏説を支持する理由となる。

ところで、流布本である古活字本と一致する割合が多いのはどうしてか。これは、前稿で触れたように、竹鼻績氏が説かれたとおり、

古活字本と萩野本は、同じ増補本を祖とするからと思われる。東松本のもとの本文と朱が入れられた後の本文との相違は、流布本と異本系統の祖本が同じ増補本原型から出たとする、竹鼻氏の説を補強するものとなっていよう。無論、流布本・萩野本など、増補される以前の本文としては、今日書写が古く貴重視される建久本や池田本が想定されることになる。異本系統と推測した平田俊春氏の諸本系統図が、ここでも納得されるところとなる。

なお、両氏で見解が分かれた裏書分註本であるが、陽明文庫本や蓬左本を見ると、巻一～巻四までと、巻五以降とはきれいに数が分かれている。本文全体を見ても、東松本系統と裏書分註本系統との関係は、上・中巻が東松本系統と離れが大きく、下巻は東松本系統に近いことははっきりしている（注1）。そういう性格は、後で触れるが、東松本側の事情によるものという考え方も成り立っていたのだが、この東松本の朱の考察からは、陽明文庫本や蓬左文庫本の側の事情に拠ることがはっきりした。つまり、裏書分註本の上巻と中巻は、東松本のもとの本の系統、言い換えれば建久・池田本などの異本系統に近い本文を用い、下巻は、校訂後の東松本系統（つまり千葉本・近衛本系統に属する）を用いた、いわゆる取り合わせ本であったと考えられるのである。裏書分註本でありながら、陽明文庫・蓬左文庫の両本には、上中巻のみに分註があって、下巻には分註が存しないというのも、その考え方の傍証となろう。

これだけで、裏書分註本の上・中巻が異本系というのは、言い過ぎになろう。裏書分註本に関して今まであまり注目されず、写本間の位置づけも明確でなく、研究が待たれるところである。現在よく目に入る、国史大系に翻刻されている蓬左本は、応永の書写と言われているが、これには江戸期書写という否定的見解があるように、さほど信頼できる本文ではない。平田俊春氏は、裏書分註の本は、江戸期の書写で、成立が最も遅いという見解であるが、すでに知られているように、裏書には「助教中原師安加筆」とあり、彼の助教時代の一一四五年ころまでに加筆がなされたこととなり、裏書執筆の以前に本文があるのだから、これも古い痕跡を有している写本ということにはなる。

そこで、蓬左文庫本よりも良質の本文である陽明文庫本と、異本系として師輔伝が残っている建久本とを対校してみると、かなりあい似た本文と言える。異なる箇所は、どちらかの誤写か、書写の過程での写し誤りなどかと想定されるものであり、確かにグループ間の差は歴然としてあるが、東松本のもとの本文と校訂後の本文のように、意味をなして対立する異同に比べると、その差異に特徴的なものがなく小さいように思われる。陽明文庫の書写は、「寛永」（1624～1643）のころという見解が別紙の切れ端にあるが、名和修氏の御示教によれば、川瀬一馬氏か高橋貞一氏により判断されたもので、信頼に足る見立てということである。すると、旧近衛家では、校訂された東松本系統の現在では京都大学附属図書館所蔵本と、校訂される以前の本文（巻一～四）に似た陽明文庫本という、両本が所蔵されていたことになる。

こうして、貴重古典籍刊行会の巻六解説で、山田忠雄氏が、東松本がもと拠った本文は、池田本に近く、池田本ないし蓬左本に類する本文を土台としたと説明したが、蓬左本を巻四までと限定すれば、成り立つ。

ところで、松村博司氏は大鏡原型を次のように想定される（注2）。

保坂弘司氏が、藤氏物語の「無味乾燥な羅列書き」や、巻六の雑々物語の突然の変容を指摘する（注3）のに対して、松村氏は、さらに登場人物の世継・繁樹らの年齢の矛盾を突き、これらは同一作者の変容ではなく、別人作者による変容と考えられた。東松本の巻一～巻四と、巻五・六とは取り合わせ本で、「ある時期に巻五が改作され、それに巻六〈昔物語〉の部分が新しく書き足されて六巻になったものであると考えられる」とし、「原型を第一次『大鏡』とするならば、この時が第二次『大鏡』の成立というべきである。このように第二次成立の本をさらに手を加えて成った改修増補本が、第三次成立の披雲閣本やいわゆる流布本といわれるものであったろう。」と説かれ、さらに、「東松本巻五・六と池田本と古活字本とを対校して見た結果によれば」、「池田本は、東松本と古活字本の混態本」と言うべきであると言及されている。

しかしながら、この東松本の朱の考察から見ても、池田本は、校訂前の本文の性格を持ち、校訂された東松本と同様に、古態を呈した本文となる。そして、東松本と異本系との差異が全巻に通っていることから、東松本を二段階の成立と考えるのは難しくなるのではなかろうか。現在残された本文を溯れば、大まかに言うと、『大鏡』には、小差ながら二つの本文系統が流布しており、異本系統もかなり古く遡れるのである。

というのも、流布本と萩野本とのズレと共通する本文を振り分けて、流布本の注記のあり方とそれが本文化されていく過程を見ると、『大鏡』成立直後になされた注記が浮かびあがる。時代を経ると意味がなさない注記がなされて、同じ箇所にさらに注記が加わり、それが後に本文化していった二重化された文章の様相も見えてくる（注4）。詳しくは別稿に譲りたいが、もっとも早い時期になされた注記を見ると、原型『大鏡』を増補して東松本になる時間的余裕はない。なんと言っても、松村氏が言われるような、東松本が新たに六巻仕立ての本に書き改められた痕跡が、他の諸本を検討しても、とにかくどこからも見出せないのである。

さらに言うならば、東松本系統から、池田本系統が成立したとは、東松本・千葉本系統のより洗練された表現からは考えられないのである。むしろ異本系が一次的に成立し、東松本・千葉本の方に修正が加わったと見た方が自然に思われる。今後は、東松本の、校訂前と朱による校訂後の本文を、表現面から比較検討して吟味していかねばなるまい。

七　むすび

朱による抹消と、朱の圏点で墨字の補入という、校訂作業が行われたのは、それでは何時、どこで行われたのであろうか。

東松本『大鏡』の裏書は、全文一筆で、本文とは別筆なので、本文書写と同時的に行われたものではなく、たとえわずかでも時期を異にして後に行われたことになる。裏書は別の本にあったものを書写したものか、または新たに筆を執ったものかの、いずれかであろう。裏書が、いわゆる千葉本系統という校訂に参照した本にあったのか否か、現在のところ決定的な決め手には欠けるのだが、裏書そのものは、東松本固有のものとなっている点は注意しておきたい。異本系の建久本傍注と似た東松本裏書は、二条ほど挙げられるが、千葉本傍注との重なりはない。また、裏書分註本を参照した気配も

ない。また、なぜか同系統の近衛本・御所本に裏書類は一切ない。

さて、裏書の文字と、本文の右傍らに施された人物注の文字とは、山岸徳平氏らによれば同一筆跡であるという。それは一見して肯定してよいと思われるが、この人物注も東松本が多く、かつ独自のものがある。東松本の人物注は、古い書写になる千葉本の人物注をほぼ含んではいるが、東松本は、文脈でそれとわかる人物にも、一つ一つ丁寧な人物注を加えており、数は千葉本よりもずっと多くなっている。同じ系統の近衛本や御所本の人物注よりも、またかなり多くなっている。人物注には、同じ系統の諸本でありながら、重なる部分と、異る箇所とがある（注5）。東松本しか見られない注がとにかく多い。さらにまた、近衛本や御所本の、和歌に関する集付けは歌集名のみだが、東松本には集名に第何巻にあるかまで注記されており、これも東松本が最も詳しい考証が行われていることになる。

東松本の裏書には、出典となる作品の抜粋や、『大鏡』の簡潔な表現を裏付けできる記録類からの抄出、さらに史実の考証を加えているなど、一貫して研究的な姿勢に貫かれている。裏書と同筆跡である人物注（本文側）が独自なものであることを考えあわせると、裏書は、校訂に際して参考にした写本にあったとするよりも、むしろ独自な見解でなされたと考えた方が、よいのかもしれない。

本文に加えられた校訂を見れば、よりよい本文に基づく本文の書き換えという作業は、一文字昭子の結論によれば、一回きりでなく複数回行われたらしいという緻密さを備えており、校訂にも人物注と裏書と同様な、かなり時間を要した研究的な姿勢があると言える。複数回にわたる校訂、徹底的な人物注、考証という裏書、これら三者に共通する姿勢から、三者ともに同じグループで、時期もさほど隔てずに行われた可能性は高い。その究明は、もと金沢文庫本という河内本『源氏物語』や、『今鏡』断簡などとも関連させて考えてみる必要がある。料紙が同質で、朱が入り、前者は、北条実時所持の本と言われる（注6）。金沢文庫本『今鏡』は、オモテの本文には東松本『大鏡』同様の淡い罫が引かれ、断簡ながらその裏書と東松本『大鏡』の裏書とは、同一筆跡と報告されており（注7）、東松本『大鏡』の朱による校訂は、たしかに金沢文庫あたりでなされたかと思われるが、詳しい考察は別稿に譲りたい。

（付記）本稿執筆の途中で東松本を再度確認のために、都合で徳川美術館で見せていただくことになった。御許可下さった東松みさ子氏と、長時間にわたりお世話下さった徳川美術館の四辻秀紀氏に心からお礼申しあげる。

なお、この稿は、加藤が平成十一年度に国文学研究資料館の客員教授の折の研究の一部であり、一文字も当時勤務していたものである。関係各位に深謝する次第である。

（注）

1　巻五と巻六とを全文にわたって陽明文庫本と校訂された東松本とを対校しても、陽明文庫本側に一文字程度の誤写と思われるものが多く、数字にわたるものは少なく、一行ほどの脱文もまま見られるが、校訂された東松本に近い本文であり、巻一～四までのような、意味がある顕著な相違は見られなかった。蓬左本もほぼ同様な傾向で、巻五・六には特徴的な相違がない。

2 『栄花物語・大鏡の成立』（桜楓社　昭和五九年五月）

3 『大鏡全評釈』上巻（学燈社　昭和五四年十月）

4 竹鼻績氏は「大鏡の成立について」（『国語と国文学』昭和三七年一一月）で、流布本には数回にわたる書き加え記事があるとし、流布本成立を長久二年（一〇四一）～長治三年（一一〇六）に限定されるとした。さらに氏は、「流布本大鏡の性格と成立」（『言語と文芸』昭和三八年五月）では、古活字本（流布本）と披雲閣本（異本）は遡源すれば共通の祖本を有したが、別個に発展成長したと指摘された。流布本成立の年代は、もう少し範囲が狭まると思われるが、ともに首肯すべき見解である。

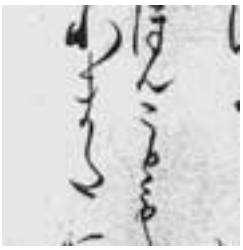
5 たとえば、師輔伝の斎院選子の御禊に供奉した「関白殿」（当時、兵衛佐）に、東松本・千葉本では「道長」と注し、入道殿に「兼家」と傍注を加える。これは、近衛本や御所本のそれぞれ「頼通」「道長」が正しく、史実考証の違いによる差異であろう。

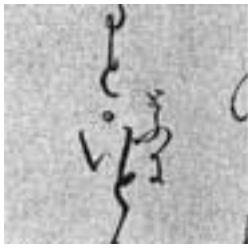
6 山岸徳平『尾州家河内本源氏物語解題』（尾張徳川黎明会　昭和十年十二月）、川瀬一馬『日本における書籍蒐蔵の歴史』（ぺりかん社一九九九年二月）

7 松村博司「金沢文庫篇今鏡」（『金沢文庫研究』69号　一九六一年七月）

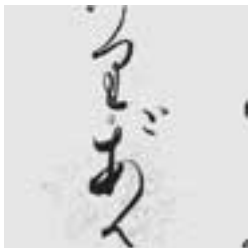
「と」資料１補（巻四・五・六）

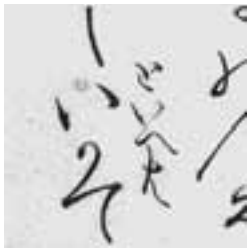
⑫4019

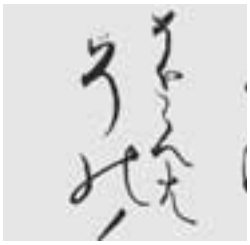

⑬5016−2

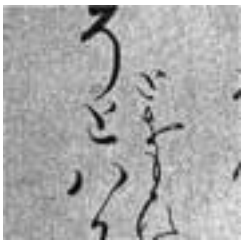

⑭5033

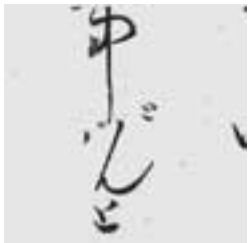
⑮5044


⑯6017−2


⑰6022−2

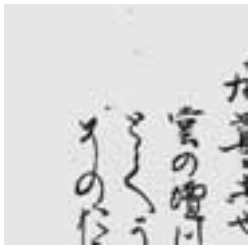

⑱6022−3

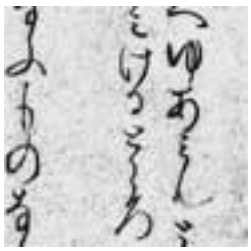

⑲6047

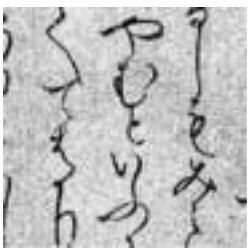

⑳6055−2

「と」資料１裏（巻四・五・六）

h 5091

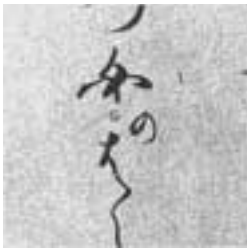

i 5096


j 6070

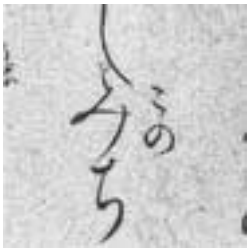

k 6079

l 6081

「の」資料２補（巻四・五・六）

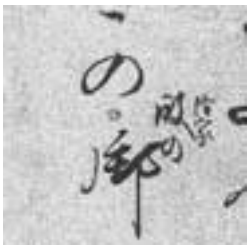


⑯4016-1

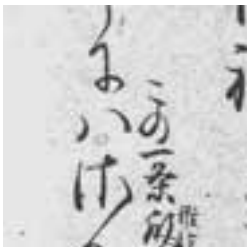


⑰4017

⑱4019



⑲4058

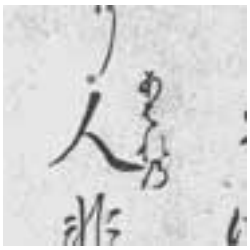


⑳6032

6041-1

「乃」資料２補（巻四・五・六）

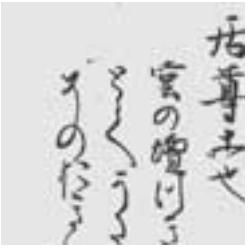
4016-2

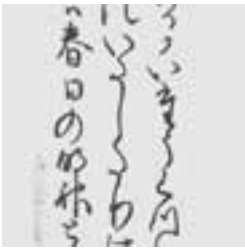


4051-3

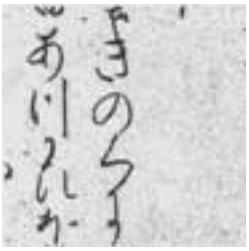
6004

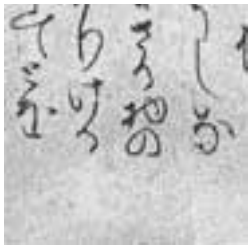
「の」資料２裏（巻四・五・六）

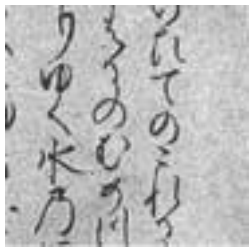

o 5096-1


p 5096-2

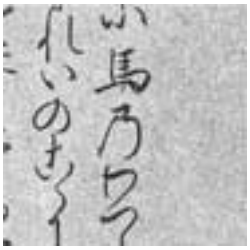
q 6070

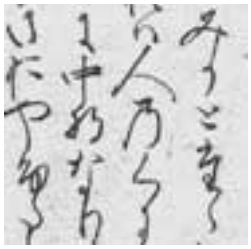

r 6079-1

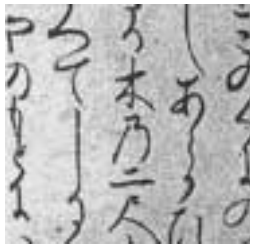

s 6079-2

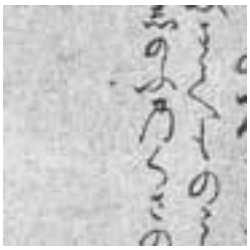

t 6081

「乃」資料２裏（巻四・五・六）

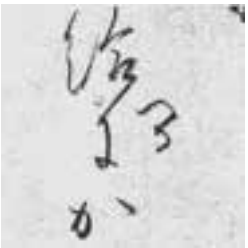

u 6079-1

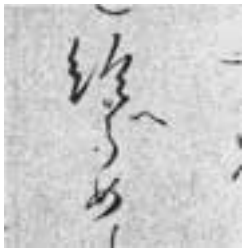

v 6079-2

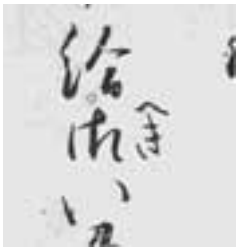

w 6080

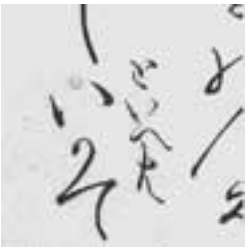

x 6081

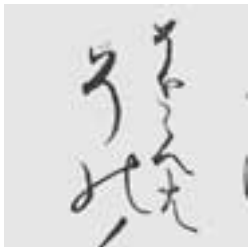
「へ」資料３補（巻四・五・六）

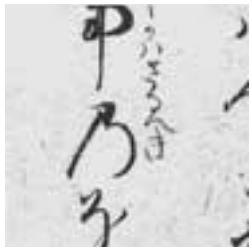

⑧4036


⑨5020-3


⑩6017-1

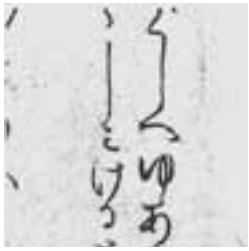

⑪6022-2

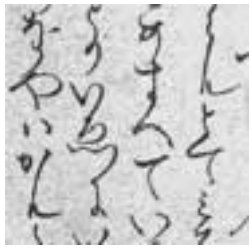

⑫6022-3

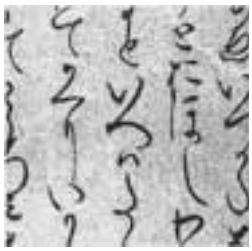

⑬6031

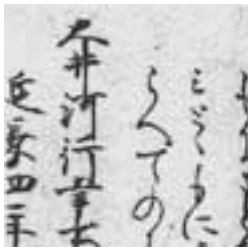
「へ」資料３裏（巻四・五・六）

j 5096

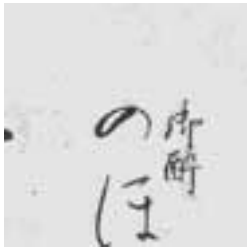

k 6070


l 6079

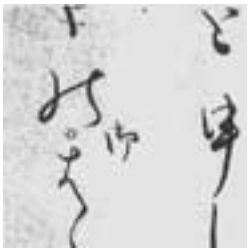

m 6080


n 6081

「御」資料４補（巻四・五・六）

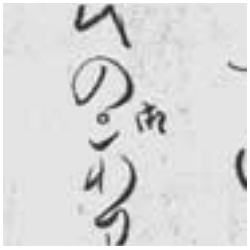

⑫4020

⑬4029


⑭4029−2

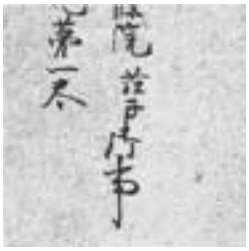
⑮5058

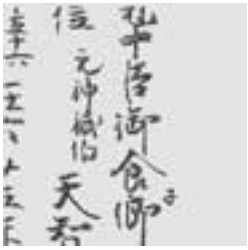
⑯5061


⑰5062

「御」資料４裏（巻四・五・六）

p 4077

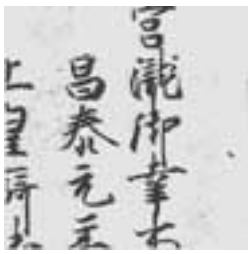

q 4085


r 5101

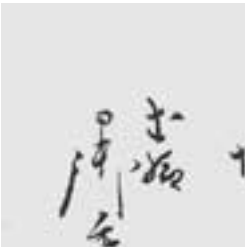
s 5106

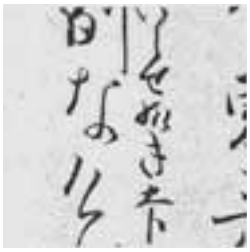
t 6068

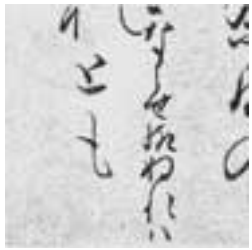
u 6069


v 6082

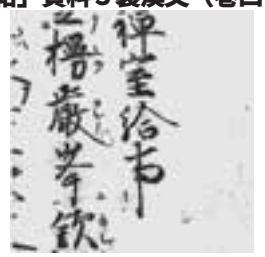
「給」資料５補（巻四・五・六）

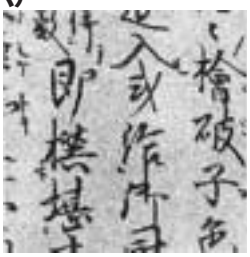

⑦5082-1

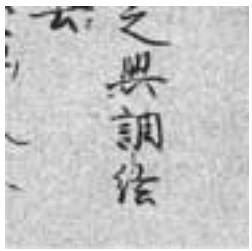

⑧6032-1

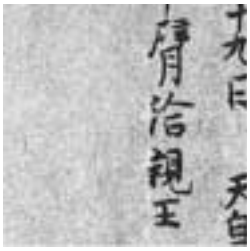

⑨6032-2

「給」資料５裏漢文（巻四・五・六）

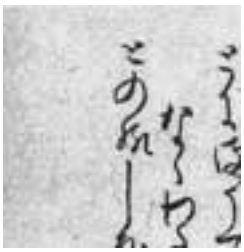

h 5092

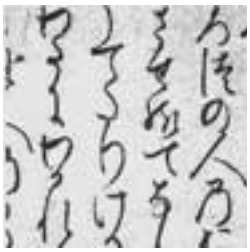

i 6069


j 6077


k 6083

「給」資料５裏かな文（巻四・五・六）


k 6080-2


l 6080-1